

大学改革に思う

小林浩二

岐阜大学 教育学部教授

はじめに

私が、東京教育大学大学院の博士課程、ドイツ留学、筑波大学の文部技官を経て、岐阜大学に奉職したのが1977年4月だから、筑波を離れてからはや30年近くが経過したことになる。その間、大学は大きく変化した。とりわけ過去10年間の変化はきわめて著しい。私の勤務する教育学部も例外ではない。

本稿では、私の勤務する岐阜大学教育学部の最近の変化の一端を報告するとともに、それに関連して私が取り組んでいる若干の研究・教育活動を紹介してみたい。

わが教育学部の変化

私の勤務する岐阜大学教育学部は、教科専門を重視するのが特色となっていた。各学科は教科専門ごとに別れており、私は地理学が専門だったので、社会科学の地理学教室に所属していた。こうした状況から、

地方の大学でスタッフが限られたとはいえ、学生が教科専門を習得するには恵まれた環境にあったといえよう。

教育学部の転機は、10年ほど前に訪れた。教員採用の門戸が狭くなり、教員採用試験への合格が難しくなったこと及び国立大学の独立行政法人化に伴う予算削減が主な引き金になったといえよう。まず前者からみると、いわゆるゼロ免コースの新設、それに連動して台頭してきた教育学部のあり方をめぐる議論—教科専門よりも学級運営などの教育実践をより重視すべきだという主張—に伴うカリキュラムの改変である。これは、制度的には、教員養成課程の定員数の減少ならびに教科専門の必修単位の減少（中学校教員養成課程では、必修専門単位が40単位から20単位に減少）になってあらわれた。今日、教育学部や教育系大学で議論の中心になっている「専門職大学院」構想も、教育実践重視の流れのなかで出てき

たものといえるだろう。実際、カリキュラムはどのように変わったのだろうか。わが教育学部を例にして若干紹介してみると、従来3年生時のみに行われていた小・中学校の教育実習が、1～4年生全学年時にわたって課されることになった（現在、一部は試行段階）。私自身、学校現場で実践的学習を積みこむこと自体奨励すべきだと考えている。だが問題は、それによって、教科専門の授業が大幅に削減され、卒業論文の作成に支障が出てきていることだ。最も危惧すべきは、こうした潮流のなかで、学生達の間には教科専門の授業を軽視する風潮が生まれていることだ。

つぎに、後者であるが、周知のように国立大学の独立行政法人化以降、各大学は、外部資金を獲得するのが至上命令になった。そのため、各大学はこぞって独自性を出そうと苦慮しているが、わが教育学部では、「遠隔教育」を目玉に据えてきた。1997年にテレビ会議システムを用いた遠隔講義を、1999年には「夜間大学院」を開設し、2006年4月からは「インターネット型大学院」の開設を予定している。「遠隔教育」は、大学以外に置かれたサテライトや職場や自宅で学習できるという利点を有している。とりわけ、県域が広くしかも山地が多くて交通アクセスが良好とはいえない岐阜県では、きわめて有効な学習手段だろう。しかし教

員と学生との直接的な接触が少ない学習システムゆえに、今後、その問題点を克服する方法を考えていかなければならないだろう。

「巡検」の重視

このような状況から、わが教育学部ではつぎの2点が大きな課題だと、私は考えている。ひとつは、いかに教科専門の知識を維持・発展させていくかであり、もうひとつは、教員と学生との接触をいかににかつていくかである。こうしたなかで、私が重視しているのが「巡検」である。「巡検」とは、地理学の専門用語であり、「指導者または案内者が中心となって現地に赴き、地理的事象の観察・観測や、現地住民からの聞き取りに習熟させるか、それらについて案内者を中心として現地討議を行う」と定義されている（地理学辞典：二宮書店）。私が「巡検」に注目したのは、それを実施することで、前述の問題（課題）を少しでも補うことができるのではないかと考えたからである。

こうした理由から、私は、今年度から新たに外国巡検を教育学部のカリキュラムに組み入れ、実施した。今年度は、ドイツをフィールドにして、10人の大学院生及び学部学生とともに10日余りをかけてハンブルク、ベルリン、エアフルトを回った。幸い、

成果は大きかった。ドイツに関する地理の専門知識の習得も、学生との交流も満足いくものだった。また、エアフルト大学では、相手側の教員・学生と情報交換することができた。一方、国内の巡検に関しては、以前から飛騨地方を主なフィールドにして実施してきたが、テーマ、内容、場所等さらに吟味し、これまで以上に充実したものにしたと考えている。

今の大学に必要なもの

「巡検」は、地理学とは切っても切れない関係にある。これまで多くの「巡検」を実施しあるいはそれに参加してきただけに、「巡検」にまつわる思い出はつきない。なかでも忘れることのできないのが、伊豆をフィールドにした「巡検」だ。学部・大学院時代をとおして、伊豆へは数え切れないほど行ったが、指導してくださった先生方や仲間達との議論、地域住民へのインタビュー、土地利用や景観の調査等をとおして、いかに新たな知見を学んだことか。新たな発見や体験をしたことか。「巡検」につれていってくださった先生の研究態度や教育に対する情熱をどれほど感じたことか。いかに多くのすばらしい仲間を得たことか…。今日、大学の大きな変革のなかにいるがゆえに、学生時代に体験したこの貴重な「巡検」を改めて思い起こしている。

今日、大学にとって最も重要なものは何だろうか。それは、教師と学生がいっしょになって学問とは何か、教育とは何かを議論することではないか。そうした研究・教育環境を構築する努力をすることではなからうか。各大学が「21世紀COEプログラム」や「特色ある大学教育支援プログラム(GP)」の獲得に必死になっているのをみるにつけ、研究・教育体制を再点検することの必要性を実感するこの頃である。

(こばやし こうじ/ヨーロッパ地誌学・農業地理学)